



タイ王国 派遣期間 2015年4月～2018年3月

バンコク日本人学校 実践報告

～ほほえみの国 タイから学んだこと～

旭川市立末広小学校

教諭 山田 瑞穂

1. タイ王国の概要

国名 タイ王国（タイ語では、プラテート・タイ。立憲君主制）

首都 バンコク

（タイ語では、クルンテープ・マハーナコーン・ポーウォーン・ラタナーコーシン・マヒンタラアユタヤー・マハーディロックカポップ・ノパラッタナー・ラーチャターニー・プリーロム・ウドム・ラーチャニウェート・マハーサターン・アモーンピマーン・アワターンサティット・サッカティッティヤ・ウィサヌカムプラシット。一般には、クルンテープと呼ばれる。）

国歌 プレーン・チャート（タイ王国国歌）

鉄道駅やバスターミナル、空港、ショッピングセンターなどで毎日午前8時と午後6時の2回国歌が流される。曲が流れている間は起立し、動いてはいけない。例えば、マラソン大会で走っている間に国歌が流れたとき、走ってもよいが（タイムを取っているため）、ゴールした瞬間にまだ国歌が流れている際には、即座に止まり、起立する。どんなに疲れていようとも、起立している。

通貨 タイバーツ（1バーツ＝3～4円）

面積 513,120km²（日本の約1.4倍）

民族 タイ族75% 華人14%

（その他） モン族、カレン族、リス族、アカ族、マレー系、イスラム系 等

人口 約6800万人

宗教 仏教95% イスラム教4%

（その他） キリシト教 ヒンドゥー教 等

気候 熱帯モンスーン気候（雨季6月～10月 乾季11月～2月 暑季3月～5月）

タイ王国は、インドシナ半島のほぼ中央に位置し、陸地ではマレーシア、ミャンマー、ラオス、カンボジアの4か国に囲まれ、海岸線ではタイ湾（シャム湾）とアンダマン海に面している。タイ国内は、一般的に「北部」「東北部」「中部」「南部」の4つに分けられる。古都チェンマイを中心に稲作、いちご、ミカンなど育てられる「北部」。国境付近には、国籍をもたない民として話題になった山岳民族も多く住む。

「東北部」はイサーンと呼ばれ、農業が中心産業であるが、最も貧しい地域と言われている。バンコク周辺に出稼ぎへ出る者が多い。「中部」は首都バンコクがあり、経済の中心である。富裕層が住む地区は、豪華なもの、便利なものであふれている。「南部」は観光地で有名なプーケット、サムイなどの島々がある。マレー系のイスラム教徒が多く住む地区となる。独立を狙う動きやテロなども少なからず起きている。



気候は熱帯モンスーン気候である。北海道と異なり、常夏の国である。気候は大きく3つに分かれている。3月から5月は雨季。気温は30~40℃。バンコクに赴任した時は、雨季。「暑さに気をつけてください。」と何度も注意を受けた。エアコンは常時付けっぱなしにした電気代より日々の健康が大事である。6月から10月は乾季。毎日1時間程度のスコールがあり、雷が鳴り、道路が冠水し、渋滞する。スコールよりも雷による停電、冠水による渋滞が困った。11月から2月は雨季。気温が25から30℃になり過ごしやすい。暑さに慣れると、肌寒く感じて、カー



ディガンが欲しくなる。雨も少なく、観光に良い時期である。

タイは王国であり、「王室を敬う」のはタイ人にとって当然と考えられている。道の公園、建物沿い、商店や食堂、ホテルなど至る所に国王や王族の肖像写真や絵が掲げられている。王室ファミリーを中傷したりすると不敬罪に問われることもある。70年在位し、2016年に崩御したプミポン国王は民に寄り添った王として敬愛されてきた。タイ通貨の紙幣は、すべてプミポン国王が描かれていた。2018年より、現ワチラロンコン国王へと紙幣の絵が随時変更されている。



2. バンコク日本人学校の概要、特色ある教育

バンコク日本人学校の概要

【歴史】

バンコク日本人学校は、世界で 88 ある日本人学校の中で最も歴史が古く、1926 年、大正 15 年に盤谷日本尋常小学校として設立された世界一歴史のある学校である。第 2 次世界大戦のため、一時閉校となった。その後、1956 年、昭和 31 年に「在タイ日本国大使館付属日本語講習会」という名称で 28 人の子どもたちと 4 名の教師により現在の前身となる学校が始まった。1974 年、昭和 49 年 7 月 24 日に現在の名称である「泰日教会学校」として、タイ国政府から正式に義務教育学校としての認可を受けた。



【在籍児童数】

平成 30 年度は、児童・生徒数 2631 名、教職員 229 名でスタートしている。世界でも 1、2 を争う大規模校である。平成 26 年度は約 3000 人在籍していたが、タイの情勢などにより多少減ってきている。また、毎年約 1000 人の入学・編入学、それと同人数の退学者がいる。児童・生徒数からも分かるように、学級数は小学部 71 学級、中学部 16 学級、合わせて 87 学級になる。教職員の数も多いため、職員室は小学部に 2 つ、中学部に 1 つと全部で 3 つある。学校は広く複雑なため、道に迷う保護者が多く見られる。赴任した当初は、教室を聞かれてもすぐに答えられず、困ったことがあった。

【学校教育目標】

- 思いやりのある子（徳育）
- 創造性を発揮し、積極的に学ぶ子（知育）
- 心身の健康をつくる子（健康）
- 国際性豊かな子（国際性）

【1日の生活】

子どもたちの 1 日の生活についてお話しする。登校は午前 8 時までである。通学バスで登校する子どもとピックアップ（保護者の送迎）子どもがいる。約 2700 名の子どもたちの 9 割は学校が委託しているバス会社のバス通学となる。バスは全部で 200 台近くなる。通勤時間は、交通渋滞が深刻なため、子どもたちの住んでいるคอนโดミニアムや自宅へのお迎えは 7 時前がほとんどである。運良くスムーズに走った場合、7 時前に学校に到着しているバスも数台見られる。それから子どもたちは読書やグラウンドでサッカーなど思い思いに自由時間を楽しむ。住宅の密集しているバンコクでは鬼ごっこやサッカーができる場所は限られている。学校についてからの長い休み



時間は子どもたちにとって最高の息抜きの場となっている。

8時から朝学習の時間が始まり、1時間目開始は8時25分である。その後、2時間目、中休み、3時間目、4時間目と進む。昼食はお弁当と水筒である。それらは教室に保管している。教室は常時クーラーをつけ、お弁当が安全に食べられるように涼しい環境を保っている。なので、暑いタイでも学習環境は快適に整っている。クーラーが寒くて、長袖を着用する子どももいる。その後、昼休み、清掃をして5時間目、6時間目となる。5時間授業で下校する子どもは14時40分、6時間目授業で下校する子どもは15時50分のバスに乗ることになる。夕方少し遅れると大変な渋滞に巻き込まれてしまう。そのため、バスの発車時刻は必ず守るようにしていた。しかし、写真の通りのバスの数で入学当初の1年生は迷子になることが多く、職員総出でサポートに回っていた。別のバスに乗り込んでしまう時など、無線で連絡を取り合い、その子を検索した。委託先のバスには、モニターさんと呼ばれるタイ人スタッフがバスに一人必ず乗ってくれていた。この助けがなければ、安全に子どもたちが登下校することは難しかった。子どもに優しいドライバーさんとモニターさんの笑顔は本当にすてきで子どもたちへの愛にあふれていた。

特色ある教育

【交流学習会】

バンコク日本人学校の大きな特色ある学校行事として交流学習会があげられる。タイの現地校との交流である。2学期の初めごろ、小学部も中学部もタイの学校と交流学習会を行っている。それぞれの国の文化を伝え合ったり、教え合ったりして心を伝え合う交流を目指し、準備を互いに進めているこの交流会に向けてタイ語の学習も行う。1日の数時間の交流ではあるが、この学習会を通じてタイ人への思いが変化したり、タイ語を学びたいという意欲につながったりしている。普段のお弁当の中身はほぼ日本と変わらない子どもたち。日本の食材が苦も無く手に入り、クラブ活動でも日本人主体のクラブや習い事が充実しているバンコクに住む子どもたちにとって、タイ人と交流する貴重な機会となっている。

【タイ語】

タイ語については、タイ教育省から週1時間のタイ語の授業が義務付けられている。そのため、小学部1年生から中学部3年生までの全学年にタイ語の授業を週1時間実施している。日本語の堪能なタイ人教諭が授業を担当している。勤務が長い教員は40年以上働いている。子どもたちだけではなく、タイへ赴任した教員にとっても、タイの事を教えてくれる良き先生であり、友である。

【英会話】

英会話の授業については小学校1年生から行っている。中等部では、通常の授業だけではなく、NETというネイティブによる英会話の授業が独自に2時間組み込まれている。討論や発表など会話が主である。英語については、バンコク日本人学校を会場として英語検定試験も行われており、バンコク日本人学校の児童・生徒も多く受験している。小学1年生の程度の子どもが英検2級を受験しに来て、自分の名前を書くことができなかつたけれども、2級に見事合格したという話も日常的に起こっている。英語については保護者の意識も高く、学校としても力を入れている。

【特別支援教育】

バンコク日本人学校は多くの日本人学校では設置が困難とされている特別支援学級がある。「なかよし学級」と呼ばれ、小学部に3学級設置されている。1年生から6年生までの子どもたちが学んでいる。通常の間割と異なり、一人一人の実態に応じた間割を編成している。「なかよし学級」の子どもたちのための専用の通学バスもある。大きな学校であるため、特別支援教育を必要とする子ども数も多く、就学指導委員会や学びの支援委員会などを設置し子どもたちに適切に指導できるように配慮されている。ただし、中等部には特別支援学級は設置されていない。そのため、小学5年生、6年生で中学進学に合わせて日本へ帰国する子どもは多い。帰国しない場合は、タイの特別支援学校やインターナショナルスクールの特別支援学級へ入学するようである。保護者の帰国とタイミングが合わない時には、父親が単身赴任になるなど、保護者の悩みは尽きないようである。また、他国へ転勤となった子どもで異動先の国の日本人学校に特別支援学級がなく、行き場がなくて困るケースも見受けられた。関わったその子については、ほぼ通常学級に適應できる状態まで、学校へ慣れていたため、通常学級へ入学が可となり、職員一同胸をなで下ろした。しかし、多くの日本人学校では特別支援学級は設置されておらず、「バンコクへの赴任でよかった。」という保護者の声を多く聞いた。



【キャリア教育】

キャリア教育の推進ということで小中学部共にみんなで夢について考える「ゆめ集会」を行っている。タイミングにもよるが、ワールドカップ間近の時には日本代表の選手、有名な女性アーティスト、大手居酒屋チェーンの社長などが講師として来てくださる機会が多いのもタイの首都バンコクならではかもしれない。



【危機管理体制】

タイは海外の中では安全な国であるといえるが、危機管理体制は日本以上に気を付けている。平成26年にクーデターが起きた。それ以降、爆破テロについては、タイで最も気を付ける引き事柄である。

学校には24時間態勢で警備員が常駐している。昼間は警察官もいる。学校の敷地全体は2m程の高さの壁で覆われている。監視カメラも常時稼働している。保護者には専用のパスが渡されており、警備員に見せなくては校地内に入ることができない。学校外での不測の事態については、大使館や日本人会、タイ教育省から情報を得ながら、対応を判断している。緊急時の対応としては、臨時休校とする場合がある。

実際には、平成28年度の国王崩御の際には、2時間で全校一斉下校の配置を取った。イングランドサッカーのプレミアリーグでレスターシティが優勝した際には、オーナーがタイ人だったため、バンコク市内で優勝パレードが行われることと



なった。この時には渋滞が予想されたため、短縮授業にして下校させた。緊急時の各家庭への連絡はショートメッセージサービスや電話による対応を行った。

3. 在任中の教育実践

在任中の3年間は、特別支援学級担任と6年生担任を担当した。その中での研究実践として特別支援学級における実践について記述する。

特別支援学級～なかよし学級

【学級の定員】

日本人学校に特別支援学級が設置されている学校は少ない。海外という環境と私立学校という側面もあり、児童・生徒数により設置が難しい、また経験のある教師の継続的な確保が困難であるなどの問題もあるのだろう。貴重な日本人学校での特別支援学級での経験をお伝えしたいと思う。

バンコク日本人学校小学部の特別支援学級「なかよし学級」は3学級ある。定員は24名である。私が赴任する2015年から3学級に増えた。それまでは2学級だった。待機児童がいたことがある

と聞いているので、定員が増えたことは喜ばしいことである。2018年の入学時において、バンコク在住の児童だけで定員に近くなってしまっていた。日本や他国からの入学・編入学希望者もいたので狭き門であることには変わりがない。

私は特別支援学級の学級編成は児童の実態に合わせて考えられる。私が所属した1年目は1・2年生、3・4年生、5・6年生と分かれていた。各学級の人数も同じぐらいであった。しかし、翌年から新入生の数がどっと増えた。1年生で学級定員が埋まってしまうほど希望が集まるようになった。特別支援学級の定員が増えたこと、充実した特別支援教育を行っていることが浸透した結果であると考えられる。私が所属した2年目は、1年生、2・3年生、4・5・6年生の学級編成となった。前述でも触れたが、中等部には特別支援学級は設置されていない。そのため、小学5年生、6年生で中学進学に合わせて日本へ帰国する子どもは多い。逆に出産が可能で日本語の通じる大病院があること、幼稚園や小学校は特別支援教育へ理解があり、支援も充実していることが知られているため、乳幼児から小学校までタイで過ごす子どもも多い。通常学級も高学年で日本帰国する子どもが増え、学級数は減少する。特別支援学級には中等部がないので、その傾向は通常学級よりも顕著である。



【なかよし学級の1日】

- 1 通学バスやなかよしバスと呼ばれるなかよし学級の子どものみの通学バス、またはピックアップで登校。
- 2 8時15分から朝の会、その後グラウンドで体力づくりのランニング。



- 3 1, 2時間目後、中休み。教室やグラウンドで息抜き。
- 4 3, 4時間目後、お弁当。なかよし1組から3組で席を交流したり、交流学級に行って食べたりする。
- 5 昼休み後、清掃活動。なかよし学級の子どもたちは自室を清掃する。
- 6 5, 6時間目終了後、帰りの会。
- 7 通学バスなどで下校。

【学習】

なかよし学級では、学級ごとに国語、算数、理科、社会、生活単元学習を行っている。他になかよし学級合同で体育、図工、音楽、英会話を学ぶ。生活単元学習は週に2時間ほど合同で行う。児童の実態に応じて、なかよし学級ではなく交流学級で学ぶこともある。

1 体育

バンコクの子どもたちは、習い事でサッカーやダンスなどを習っている場合を除き、危機管理のめん

からもコンドミニアムや自宅での生活が多い。思い切り外を走り回れるのは学校のグラウンドであり休み時間を心待ちにしている子どもは多い。体育の授業では、体力づくりを兼ねて縄跳びや水泳などに取り組む。縄跳びはバンコク日本人学校で学期ごとに縄跳び集会で学級対抗戦を行っている。そのため、4月から縄跳びに取り組み、交流学級での活動に参加していくことへの支援を行っている。水泳は通年取り組んでいる。バンコク日本人学校の5年生は1学期にチャム臨海学校という宿泊研修に出かける。海で500mほど泳ぐため、4月から水泳の学習時間が増える。なかよし学級では、タイ人コーチ2人も含めた水泳指導を受けながら学習に取り組んでいる。50m、8コースの大きなプールで水に親しみながら、楽しく泳ぎを学んでいる。タイ人スタッフは水泳指導のプロであり、どの子にも笑顔で優しく教えてくれるため、子どもたちも安心して水に親しんでいくことができる。各学級の担任も水に入り、子どもたちの指導に当たっている。多くのスタッフに支えられながら指導を受けられる。



2 2 生活

単元学習～APCD校外学習～

生活単元学習では、四季折々の行事についての学習や生活に関わる体験学習を行っている。ここでは、パン作りと購入の校外学習について紹介する。

ここ数年、APCD（Asia Pacific Development Center on Disability）アジア太平洋障がい者センターの御協力を得て、パン作りと購入の体験をさせていただいている。こちらのセンターは障がい者が主体となる社会開発の広域プロジェクトであり、タイの障がい者など開発途上国のNGO関係者が中心となり約4年の歳月を経て調査・計画されたものであり、2002年より国際協力事業団

(JICA)が日本のODA(政府開発援助)を通じて必要な技術協力をを行うことになっている。私がバンコク日本人学校に在籍している間にJICAの専門家の方が、APCDに派遣されており、大変親身になって橋渡しをしてくださった。その御縁で今もAPCDのスタッフの皆さんに御協力をいただいて、子どもたちは良い経験を得ることができている。APCDのパンの販売には日本のヤマザキパンが協力している。安全で安心なパンを店舗で購入することができる。店舗もAPCDの施設の一角に設置されているため、安心して活動に取り組むことができる。



子どもたちは、授業でパンの作り方、購入の仕方、約束やマナーなどを学ぶ。パンを作り、販売する練習の時には、なかよしボランティアと呼ばれる保護者の方々がサポートしてくださる。作るパンはソーセージロールとチョコレートロール。くるくるパン生地を回す動作は子どもたちには難しいが、一人一人に支援が行き届き、みんなが楽しく、練習に取り組むことができる。

実際にAPCDに行くと、ヤマザキパンを作っているタイの障がいをもつ職員の方々がパンの作り方を丁寧に教えてくださる。みなさん、とても優しく親切だ。タイの人々は子どもに対して、本当に温かい。パンを作ったり、購入したりする経験は子どもたちにとって自信になり、そのおいしさやおみやげにもらった作ったパンの温かさで帰りのバスの中は笑顔が溢れる。そして、おみやげと子どもたちの笑顔を見た保護者の皆さんも笑顔になる。

バンコクという外国で、日本で経験するような貴重な体験を行うことができる。タイと日本が協力し合って取り組んでいる障がい者のためのプロジェクトにより作られた施設をアジアの一員のバンコク日本人学校の特別支援学級の子どもたちが利用できることは素晴らしい。プロジェクトの意義を感じると共に、子どもたちにとってタイや日本の人々の優しさや良さを実感することができる学習となっている。



4. 派遣国の生活全般にかかわって

大学卒業後に幼馴染と旅行に出かけた最初の外国がタイだった。あまりに楽しく、人々が優しく、

食べ物がおいしく「また来よう。」と話していた。まさか、その国に派遣されることになるとは思わなかった。派遣されたタイはやはり素晴らしい国だった。3年間は楽しいだけではなかった。ひとつ心に残る出来事がある。子どもからの一本の電話が担任に入った。保護者が倒れたとの知らせ。その子が頼れる場所は日本人学校しかなかった。ここから、学校、病院、大使館、日本の警察、日本とタイ両方につながりのある弁護士の連携によるその子を日本へ無事に返す取組が始まった。「子どもの命を安全に守ること」、そのために力を合わせた。様々な出来事が起こる。だが協力し合い、乗り越えていくことができた。3年間のタイでの生活で学んだことは人の温かさだった。タイで経験した全てのことは人が繋いでくれたものだ。感謝の気持ちを持ち、今後も教員としてこの経験を生かしていきたい。